感動 ～自然から感じるもの～

名人　小林　繁(70)　岐阜県高山市
聞き手　田口　克大　岐阜県立加茂農林高等学校2年

平成19年取材

「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもってその業を極め、他の模範となっている達人で、毎年、全国で約100名が選定されています。岐阜県においては、現在、38名の「森の名手・名人」がいます。
この「森の名手・名人」を「森の"聞き書き甲子園"」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から誌面の関係上要点を抜粋したものです。なお、年齢、住所、学年は取材当時のものです。

▼小林　繁さん

1. 名人の知識

僕はもともと、この山の一軒の宿の長男でここを守らなきゃいけなかった。昔は大変だった。こんな所、道もこんな良くなかったですよ。だけどこんな不便な所で生きていかなきゃならないから、自然のことを色々勉強したんですよ。僕は本来料理人なんですよ。で、料理するなら山菜をやろうって事で、岐阜、京都で料理の修業したんですよ。それから、山菜とか山のものを勉強したんですよ。

一番のポイントはねぇ、先人、昔の人達。彼らも勉強したことじゃなくて、山で体験したことなんですよ。聞いてみると、科学的なこともいろんなことも、なんか結びついてくるものがあるんですよ。

この植物はおいしいけど、こっちは毒があるってことまで全部知ってる。これは薬草やとか。キハダは苦くて、煮詰めて乾燥して丸めておけば百草丸になるとか。セフリって言う薬がある。風邪とか胃にものすごい良い薬。こっちの林道にものすごいあって、それを根から取る。ところがねぇ、根から取ってしまったら無くなってしまうから、上の方にあるのは全部残して、下のやつだけ取ってくるわけよ。そういうのは凄い知恵袋なんだな。それを僕らが受け継いでみんなに伝えていきたいなって思ってるんですよ。

2. 氷点下の森

氷作るきっかけっていうのは、山んなかで、なんにもないがね。お客さん冬になんか誰も来ないよ。で、そんな山んなかで、生きていくにはどうするかってことで、じゃあ変わったもんなんかやろうと考えて。スキー場だとかスケートだとか、そういうもの考えたけど、結局金がかかるし、こんなことしかできないなーと思いながら、まァ氷を作るっていう。森の中に2月から3月あたりに、ブルーになる美しい氷がある。そのことを思い出して、あーいう氷を作ってみようってやったんですよ。最初から俺が運が良かったのが、テレビから新聞、全部第一回からずーっとニュースに扱ってくれたこと。半面馬鹿げたような氷を作っておかしなことやっているけど、報道が取りあげてくれると、良い方に変わってくるんだよねぇ。自信があってもやっぱり寒い山ん中で氷を作っているおかしな人としか思わんわね。でもあきらめずに作っていったのが、まぁ今は、全国レベルに認められるようになったんだけどね。氷を作っているところは氷だけ。広葉樹を綺麗にみせて感動させようとか、いろんなとこに段々発展していって。で、冬の寒い中でシャボン玉とばして凍らせようとか。

最初の頃は、なかなか誰もやってないことだから、参考書あるわけじゃないし、大変だったですよ。みんな酒飲んでそれから外へ出て行くもんで、寒さん中に。その時は夢中でやっていたんだけど、水のトラブルが発生して、きしっとやったつもりがね。水の取り入れ口いって水をとりいれてくるわけよね。オッケーかと思ったらまた失敗でまたとめにいって、また修理して。自分の子が山にむかっていくわけよね、2人で。吹雪の中でねぇ、子供の姿が段々消えていくの見とったら、ホント涙でたよね。俺がこんなことやって子供達に苦労させてんだなと、感動したんや無くてもう、あーっとんでもないことやってんだなって。

▲苦労して作り上げた氷点下の森

3. 自然は素晴らしいドクター

この言葉が僕に生きてるんですよ。ここへ来る人は皆、失礼な言い方かもしれないけど、患者さんなんです。コンピュータだなんだで自然との関係崩壊。疲れきって自然のドクターのところへ来た人たちだから、私はここに住んでる人として受け入れて、ナースとしていろいろ話したりすることによって、皆が元気づいていくという。そういう立場で使命として、岩石や地質、昆虫、植物も勉強して、自分で考えて先人の知恵を借りて、仲間を森を守っているんだ。守るだけは誰でもできるからねぇ。守るためには、多くの人に感動を与えて、感動から、そうかとか、あぁやらなきゃいけないってことに導いていく。そのつなぎが僕の立場だろうと思ってやっているんですよ。

私はここで生まれてるから、自分の里に自信を持ってる。自分の故郷に自信を持ってないと、何見ても良いものには見えないよね。でも、ここはやっぱりすごいと思ったら、全部良いものに見えてくる。自然は素晴らしいドクター、そして俺はナースとして、都会から来た人みんなに自分の知識を話しながら感動してもらって、感動で人間関係、自然関係を作ってほしい。

▲地元小学生を対象とした動植物及び木の実の観察会

4. ミストの森

今年は、猛暑と気象庁で発表されていたから、涼しい森ならと思って「ミストの森」という名前で一応やったんですよ。森の小川の上にホースを引いてきて、ホースに穴を開けて高いところから水を撒く。すると冷たい水が降るんだけども、落ちるときに森の温度を下げて、涼しくなるという。そしてその水滴は小川だけじゃなくて周囲にも落ちるから、石とかに苔が生えて綺麗になるだろうと。それをやったらすごく好評だったんですよね。それに薬草がいっぱいあるから、薬草茶を作って、冷たい小川で冷やして飲んだら面白いなって。で、健康のためにも良いし、飲むということで心が和らぐから、精神的にも良いわけ。涼しくて、感動して。それが森のドクターであるというわけ。

5. 散歩村

そもそも昔の人は、食べるものも栄養とか関係ないんだね。だから細々と自給する。栄養を薬草茶とかで補って、元気になって働いていたんだから。これも先人の知恵やね。それを今我々が、豊かな生活の中でふと振り返って、森の中で薬草茶を飲みながら、涼しいね、緑が良いね、なんか言いながら昔の賢い生き方を分かってもらう。そういう流れをやっているのが散歩村というもの。

散歩村の中には、大きな木があり、横たわっている木があり、ブランコなんかもみんな木の枝にくっついているんですよ。家族でお客さんがきて、子どもがおおかた一日中そこで遊んでいてね。食事したらもう寝ちゃったっていう。疲れきってね。親は大喜びでね。こんなに夢中になり、こんな疲れた子どもの寝顔を初めて見たと。

この森の中には細かい道路がいっぱいあるんですよ。それぞれ変わったところを歩けるようにね。この森はどこを見ても木漏れ日が入ってるんですよ。全体にくまなく太陽の光が照る。だからここの植物はみんな元気。すべての植物が花を咲かしてる。最近困るのはイノシシがきてねぇ、花を食べちゃうからねぇ。植物が傷んだり枯れちゃうんだよね。

▲周辺の森林を守り続けてきた

6. 山にいるものの使命

栗の実は非常に小さいけど、非常においしくてね。これを煮てお客さんに出すんですよ。僕は色々な見方をしてるんだけど。例えばみんなは、でかい栗を拾っていくわけよねぇ。だけど、栗には栗になれない栗もあるんですよ。これを何かにできないかと思ってここに爪楊枝を刺すと、スプーンになるんですよ。いらない木の枝があるからこれにかえて刺したらかっこいい。みんなが「うわぁ素敵」っていうわけやね。僕は山にいるから、山のものを大切にしなきゃいけない。利用しなきゃいけない。無駄なものを、無駄じゃないように使ってやるっていうのも大切なのよ。自然の中の恵みをちゃんと使って、それを見ていただいて、感動してもらう。感動が大事なんですよ。理解する前に感動したら理解できるんだよ。そこに来た人をどういう風に感動させ、理解させるかが山の中にいるものの使命。

今年、大きなミズナラの木が倒れたの。コースのところに倒れたから、伐らなきゃいけない。けど、その木をちょっと持ち上げると、その下が通れるようになるわけよね。すると「俺は疲れ切ってとうとう倒れたよ」と、木の声が。じゃあ今度、僕のほうから「みんなこの木にパワーをやろうよ。そうすれば生きられるんだよ」っていうと、みんなそういう気になってくれて、「元気になれ」とか「頑張れよ」とかっていうわけやね。そうすると、ミズナラの木の肌の感触が分かるわね。触れた人が。で、俺はパワーをやったんだっていう、木に対する愛情じゃないけど、つながりがあるでしょ。で、自然の触れ合いに導くためには、この木を枯らしたり伐ったりしちゃいけないの。不思議な木とのつながりができるんだよね。そういうふうにして森に来た人に何かちょっと違うものを感じてもらおうとして木を持ち上げて。そしたら、そのまま生きてる。枯れるはずが、枯れてない。そういうことをするのが僕らの使命です。

森を守っていくということは、ホント大変なことですよ。ただ森を守るだけでは駄目なもんでねぇ。ここに来てくださった人が、非常に自然つて素晴らしいなって、感動してくれる。「じゃあこれ、大切にする価値あるんだね」と、そう言ってくれたらオッケーなんですよね。

▲ツリークライミングの活動を指示している(カサをかぶっているのが小林氏)

名人 小林（こばやし） 繁さんのプロフィール

- ●生年月日：昭和12年10月29日生まれ
- ●出身地：岐阜県高山市朝日町
- ●職　業：旅館業

高山市朝日町の秋神温泉旅館を経営する傍ら広葉樹林を利用した散策コースガイドや小学校児童の交流会、ツリークライミング教室、氷点下の森など様々な森に関わる活動を積極的に開催している。また、後継者の育成にも日々力を注ぎ指導をしている。

※原本は長文のため、文章の一部を割愛しています。

【森の名手・名人編集担当
㈳岐阜県緑化推進委員会　佐藤正吉】